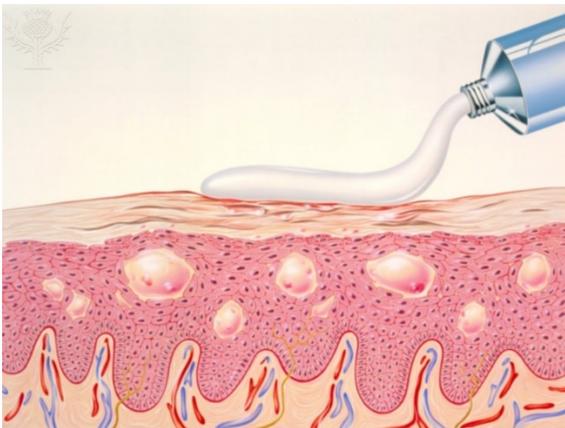


Efficacy and tolerability of proactive treatment with topical corticosteroids and calcineurin inhibitors for atopic eczema: systematic review and meta-analysis of randomized controlled trials.

[Schmitt J](#)

[Br J Dermatol.](#) 2011 Feb;164(2):415-28.



背景

長期の低レベルの局所抗炎症療法はアトピー性皮膚炎の治療において新しいパラダイムシフト（訳注：大転換）であることを示唆されてきた。

目的

アトピー性皮膚炎において炎症予防のために局所ステロイドとカルシニューリン抑制剤（訳注：製品名プロトピック）の効果と耐性を調べる。

方法

アトピー性皮膚炎の炎症予防のために局所ステロイドと／または局所カルシニューリン抑制剤の効果で報告されている無作為コントロール試験のシステマチックレビューである。

システマチックにコンピュータによる検索(コクレーン、メドライン)と手作業によって追加した関連文献を調べた。

基本的な効果のエンドポイント：プロアクティブ抗炎症治療中に少なくとも一つの炎症があった患者の比率。

相対リスク(RRs)と信頼区間(CIs) が計算されて無作為

効果メタアナライシス使用し薬剤部にプールされた。感度の解析は研究特異的共変数の影響を調べるためのメタアナライシスを含めた。

結果

8個の基剤コントロール試験での9個の文献を含めた。

3、4、1個の文献はそれぞれタクロリムス（訳注：局所カルシニューリン抑制剤）、フルチカゾン・プロピオネイト、メチルプレドニゾロン・アセポネイトによるプロアクティブ療法を評価している。

8個の試験での薬剤は基剤よりも炎症を予防する効果があった。

メタアナライシスではフルチカゾン・プロピオネイトはタクロリムスよりもアトピー性皮膚炎の炎症を予防する効果あることを示した(RR 0.46, 95% CI 0.38-0.55)。

多変量解析ではこの所見が明確であった。

プロアクティブ抗炎症治療はほぼ問題無く行われた。
しかしこの治療は長期の安全性において確定的な結論をまだ出せない。

結論

基剤コントロール試験はアトピー性皮膚炎炎症予防するためのタクロリムス、フルチカゾン・プロピオネイト、メチルプレドニゾロン・アセポネイトによる使用がプロアクティブ治療の効果を示した。

基剤コントロール試験による間接的なエビデンスは
一週間に2回のフルチカゾン・プロピオネイトの塗布がタクロリムス軟膏よりもアトピー性皮膚炎の炎症予防にはより効果があることを示した。

この結果を確定するためにはそれぞれの薬剤をお互いに比較する試験が必要である。

アトピー性皮膚炎プロアクティブ療法の長期安全性を評価するための今後の研究が必要である。